

浅春の朝、皆々様には益々御健祥の事と拝察いたします。さて例によつて事務的なことを三三申上げたいと存じます。どうぞよろしく御協力の程おねがいたします。

☒三十七年度の配本について

種々の事情で大へんおくれご迷惑をおかけいたしました。来年度は是非共願調にすすめたいと存じますのでご了承下さい。

☒会員の継続について

今迄の会員は全員御継続下さいますようお願いいたします。若し止むを得ざる事情で退会なさりたい方は五月末日迄に事務局迄ご連絡下さい。期限内にご連絡がない場合継続と認めて処理させていただきますので御了承下さい。継続についてはあらためてお申込は必要ございません。

☒会費について

三十七年度会費未納の方は大至急御払込み下さい。三十八年度も会費は年額壹千円ときました。どうぞ早目に、成るべく六月末日迄に前納して下さい。会費が早く集まればそれがよい循環をして本の準備が下り、内容をより充実したもの出来るわけです。

☒送料について

郵送希望の方又は郵送によらなければ配本出来ない方は会費に会費百円を加えてお払込み下さい。

☒会員の現況について

三十八年一月末日現在、一七七〇名です。年度末までに会員を二〇〇〇名にしたいと存じ本は用意してあります。どうぞ一人でも多く会員が増しますよう御紹介下さい。では皆々様の御清福をお祈りいたします。

☒三八年度の刊行予定について

この程開かれました役員会にて、次年度の刊行予定のテーマを審議し、次のよう四冊の案を内定いたしました。

- 「妙義山」(三山シリーズ)
- 「古城趾めぐり」
- 「バスの窓から」
- 「近世群馬の人々(2)」 (いづれも仮題)

来年度はとくに今年度のように配本の遅延を防ぐためにも早めに執筆を依頼し、スムーズに刊行配本できるよう万端の準備を進めており、遠からず執筆者等もお知らせできると思います。



みやま文庫

会報

No. 3
38.2.1

みやま文庫誕生の記

みやま文庫幹事 萩原 進

《産もうとした動機》 県内の地方文化を育てる一つの方法として、出版文化が大きき使命を持つことが叫ばれながら、百六十万県民の人口では到底東京出版に匹敵するよるうな安い値段で供給できない。発行部数は制限されてしかも売れない……これでは地方文化は育たない。そこで、会員制度にし、一定の会費を持ち寄り、よいものを企画出版して残部なし、儲けなしの文化事業としてやる以外にないというのが、産んで見ようとした動機であつた。

《第一次の試み》 多分昭和三十年頃であつたらうが、群馬県文化協議会(篠原秀吉会長)で庭山政次氏らと話し

合いこれを取りあげ、当時の知事と教育長に陳情書を出したが、これはついに不発に終わった。

《第二次の試み》 そこでしばらく冷却されていたが、昭和三十五年に群馬県議会議事室の運営委員会がこのことが議題となり、古屋栄吉(委員長)安藤賢一(副委員長)班名一雄、酒巻万七郎、石坂広枝の諸氏が、やつてみようというこ

とになり、具体的にすすめるよう異常な熱の入れ方であつた。そこで、小生が走り役を命ぜられます県教育長の黒沢得男氏に話を伝えたところ、前の陳情の時からこのことに関心を持っていたので「大いにやろう」ということになり、次いで浜松の支局長時代に文化運動をやつた毎日新聞前橋支局長の吹山保忠氏が、これまた前から郷土文化を育てることについて熱意を披瀝していたので、黒沢氏と同進吹山氏の自宅を訪ねたところこれも大成功であつた。その結果を古屋、安藤の図書室委員に伝え、すぐ発起人会を持つという事になり、黒沢、吹山二氏とともにその人選に入り、世話人として、篠原秀吉、吹山保忠、小坂輝雄(県会議長)近藤英一郎(同前議長)古屋栄吉、竹腰俊蔵(知事)神田坤六(副知事)黒沢得男、横山太喜夫(群銀頭取)島岡利二(弁護士)相葉伸(群大文学部部長)の十一氏が

世話人として選ばれ、個々に手分けで内交渉を進めたところ、いずれも快諾を得たので、いよいよ発足への希望が持てるようになった。

▲**第一回世話人会**▲ 六月二十一日午後二時に、知事応接室で、歴史的な第一回世話人会が開かれ、神田副知事が選挙の関係で出席できなかつたほか竹腰知事、横山頭取、島岡弁護士、小坂議長、浜名二雄、堀川寛一、のお歴々がスラリと出席された。会議は吹山、黒沢二氏が幹事役として会を進め、かなり突っこんだ質問も出たが、その時仮称「みやま文庫」の構想という印刷物を中心として説明が行われ、(一)東京の既成文化に対抗して地方文化を確立し(二)県では必要であつて東京方面の商業ベースに乗らない出版物を主とし(三)隠れた研究家研究物を発掘し(四)事業は冗費を省くため県の行政機構の中に入れ(五)とりあえず一千名を目標とし(六)一人年千円を前納で徴集し(七)百万円とし(八)あとは県の補助や寄附金による(九)次回までに規約案と各界を網羅した発起人名簿を制作して審議決定するなどの諸点をきめて散会した。各世話人とも異常な熱意を披瀝されたことはいりまでもない。

▲**第二回世話人会**▲ 七月二十六日、再び知事応接室で開かれ、相葉伸氏欠席、県会議長が副議長代理(星野祐一氏)で開かれ、規約の審議と発起人百四十九名を決定し、なお黒沢教育長より事務局は、県立図書館長に話したところ

ろ引き受ける由であるから教育委員会に頼むという原則的などりきめが決定した。一時は社会教育課、県の広報文書課といった線も出たが県立図書館に落ちついたのであつた。

▲**創立総会**▲ こうしている中に年を越し、昭和三十六年に入り、県立博物館兼公民館長であつた友重繁氏が事務を担当することになり、発起人総会と創立総会を開く準備をすすめて、三月七日午後二時、前橋労使会館で世話人代表の神田知事、篠原上毛新聞社長、横山群銀頭取、島岡弁護士、小坂議長、相葉部長、古屋県議、近藤県議、吹山支局長、黒沢教育長、の十名の招請状で開かれ、規約審議、運営、編集方針の決定、役員決定などをきめて閉会し、ここに、みやま文庫が誕生を見るに至つた。この間における県議会図書室運営委員各位、吹山保忠氏、黒沢得男氏のかげの力は、本文庫の続く限り忘れてはならない苦心と功績があつたことを特に記しておきたい。また竹腰知事、神田知事、横山氏、島岡氏、相葉氏などの力強いバックアップも併せて記しておきたい。

▲**よちよち歩き**▲ こうして運営委員長古屋栄吉氏、県立図書館長田村達彦氏や奥野氏、小平氏、中沢氏の運営面における事務的な面の尽力と、編集委員長相葉伸氏と群大図書館野口氏、柿沼氏などの奉仕の尽力でとにかく歩きはしめたのであつた。いま二年目を終わろうとしてまことに感慨深いものがあり、同時に産まれるまでのいきさつを忘れられな中に書いておいて、会員諸賢の絶大な御声援をお願いする参考供した次第である。

会員だより

分校の四季

「山に育つ子」を読んで

斎藤 貞八郎

(前橋・若宮小)

「山に育つ子」を読む、私も曾つてへき地の教場に教鞭を取つた一教師として、山の子らと過した分校の四季をしるのび秋の夜のふけるのも忘れた。終戦後まもない二二年四月から七年間、私は出身校の先生になつて、草津小學校前口分校に奉職した。学級数二、児童は四年生まで約六〇。

春

分教場の校地の両側は深い谷川になつていて、それが校地の南側で合流する。だから校庭は三角形で、ねこのひたひたのよりにせまい。

子どもたちは、谷底におとしたボールを、ひろいにくが、またのりしみのよう、競争で木の根や岩かどにつかまつてがけをおりていく。

そのせいか、ちく木もなく、ほんとう樺もなかつたけれど懸垂登坂の力は相当のものようであつた。かえりがけに、岩の穴にあつた大ルリのすを、ひなごとつてきたりした。

夏

学校のまわりは木立ちにおおわれていて、緑の箱の中にあるようになる。

こういうところだから教室はとほしいが、自然の観察にはことかかない。大雨がくると何分ぐらいで水がにごつてきて川音が高くなることや、白雲が空をよぎつて日ぐもりすると、「えそはるぜみ」は鳴きやむことや、教室にはいつてくる「はち」の、どのなかまが迷わずにそとへでいけるなど、こどもたちはよく知っている。ちよつとした博物学者だ。

秋

自然の中にいる子どもたちは、いつはりでは文化にあこがれている。だから、先生の話には、それこそ耳をかたむけるし、ラジオの学校放送には、身をのりだしてきく。買いこんだ幻燈は、毎回おなじフィルムをうつすのだが、目をかがやかしてみている。文化はらんの中において、めつたにおどろかない町の子とは、くらべようもない。

冬

学校を改装し影絵することになつた。白いものが毎日とんでくるよになつて、はくと家内と子どもは、宿直室をでて民家にうつつた。子どもたちは神社のそばの公会堂にうつつた。午前が一、二年生で女房が出る。午後はほくがしかけて三、四年生がくる。ストーブといろりの火をどんとんたいても、どうにも寒くて、しかたなしにストーブのまわりといろりのまわりにあつまつて勉強したことがなんどかあつた。

そんな中で四年生は赤仁田分校の子どもとそろばんの試合をするので、うでによりをかけた。

へき地にも文化の波がよせて次第に近代化するだろう。環境は変つても山の子らが清純な童心をもちつつける事を祈りにも似た気持で願ひこの本をそつと閉じた。